

2 生徒の学習の成果を的確に捉える学習評価の充実

■ 資質・能力を総合的に見取る評価方法の活用

「子供たちにどういった力が身に付いたか」を的確に捉えていくには、見取る観点に応じ評価方法や評価場面を工夫することが必要です。そこで、本研究では、資質・能力を総合的に見取るための評価方法として、パフォーマンス評価に着目し、以下のような考えで取り組みました。

○ パフォーマンス評価

「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。
 論文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。（「答申」補足資料より）

パフォーマンス評価の実施にあたっては、知識や技能を活用することを求めるような状況を設定したパフォーマンス課題を生徒に取り組みせ、その達成度合いをルーブリックに基づき評価していきました。

○ パフォーマンス課題

パフォーマンス課題は、単元構想シートの「単元における学習課題」に関連させて設定することを旨とし、生徒にとって思考する必然性があるものとなるよう留意しました。なお、パフォーマンス課題をつくる際には、以下の①～④の手順を踏まえながら、教科の特質に応じて作成していきました。

「パフォーマンス課題づくり」

①単元の重点目標は何か見当をつける

②「本質的な問い」を明確にする

→単元構想シート：単元における「学習課題」に基づく

③その問いに対してどのようなレベルに達してほしいかを明文化する

→単元構想シート：単元における「期待する姿」に基づく

④パフォーマンス課題のシナリオを作る

<パフォーマンス課題を作る際の視点>

妥当性：測りたい学力に対応しているか

真正性：リアルな課題になっているか、現実世界で試されるような力に対応しているか

切実さ：生徒達の身に迫り、やる気を起こさせるような課題か

難易度：生徒達が背伸びすれば手が届く程度の、ちょうどよい難易度か

※参考・引用 西岡加名恵『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』 2016 明治図書出版

「本質的な問い」：

「～とは何か」と概念理解の表出を求めたり、
 「～するにはどうすればよいか」と方法論を尋ねたりする問い

○ ルーブリック

「ルーブリック」

成功の度合いを示す教レベル程度の尺度とそれぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。（「答申」補足資料より）

本研究においては、単元構想シートの「期待する姿」に基づきながら、ルーブリックを5段階で作成していきました。このルーブリックは、生徒にも示し、目指す姿を生徒が理解して学習に取り組めるようにしました。

○ 生徒の自己評価の分析

生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるようにすることを目指し、自己評価活動を学習過程に位置付けていきました。振り返りでは、学習課題に対する振り返りと学習活動に対する振り返りの両面で行い、教員はその記述内容等を生徒の学習状況を捉える評価材料の一つとして活用しパフォーマンス評価の充実につなげました。

○本研究で取り組みました国語、社会・地歴公民、数学、理科、外国語（英語）の研究成果をガイドブックとしてまとめておりますので、ぜひご覧ください。

○本研究の報告書（総論）と各教科のガイドブック及び単元構想シートは、下記の岩手県立総合教育センターのWebページに掲載しております。

■これまでの研究一覧 <http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/h09~/index.html>

研究主題 資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む 授業の在り方に関する研究（2年次）

－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して－

【2年研究】

総論

【研究担当者】 新 沼 健

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2735 FAX 0198-27-3562

E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

I はじめに

これからの社会を創り出していく子供たちに求められる資質・能力について、学習する子供の視点に立ち、『何がどのようになるのか』という観点から、育成を目指す資質・能力が以下の三つの柱で整理されました。（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）（以下「答申」という）より）

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養）」

これら「三つの柱」を総合的に育むためには、『何を学ぶのか』という指導内容等の見直しとともに、それらを『どのように学ぶのか』という子供たちの具体的な学びの姿について「主体的・対話的で深い学び」の実現の観点からの見直しが欠かせないものとされています。子供たちが主体的に学ぶことやグループの中で協働的に学ぶことについては、特に小・中学校において、多くの実践が重ねられてきており、各種調査結果からその効果は実証され、今後はさらなる充実が求められています。また、高等学校においては、義務教育までの成果を確実につなぎ、一人一人に育まれた力を発展・向上させることが求められています。そこで、本研究では、以下の視点による授業改善を積み重ね、「生徒たちにどういった力が身に付いたか」を的確に捉えながら、「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方について明らかにしていくことを目指していくこととしました。

○「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることである。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関係付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

「答申」pp. 49-50 ※太字は担当者による

II 「三つの柱」を総合的に育むための取組

「三つの柱」が総合的に育成される授業を目指し、次のことを関連付けて研究しました。

- 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
 → 単元構想シートを活用することで、教員が単元の指導構想を深めることを目指す
- 2 生徒の学習の成果等を的確に捉える学習評価の充実
 → パフォーマンス評価を実施することで、教員が資質・能力を的確に見取ることを目指す

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

ア 単元構想シートの活用

授業改善を行うために大事に考えていきたいことを明らかにし、どのような思考で単元の指導をデザインしていけばよいか道筋を示すことが必要と考え、「単元構想シート」を開発し、それを活用しながら、教員が単元の構想を深め、学習指導の充実につなげていくことができることを目的としました。

〇〇科単元構想シート *単元や題材など内容や時間のまとまりで作成する		
単元名	対象学級	○年□組
	生徒数	男 名、女 名、計 名
	担当者	
1 単元の目標(何ができるようにするか) ※ 評価規準は、単元の目標に準拠する。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力等
2 単元で働かせる「見方・考え方」		
3 単元における「学習課題」と「期待する姿」		
【単元の学習課題】		
【期待する姿】		

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて(各教科における授業改善の視点)		
主体的な学び (学習への興味や関心を高める場面、学習の見通しを持つ場面、学習を振り返り次につなげる場面の設定)	対話的な学び (自己の思考を広げ深める場面の設定)	深い学び (見方・考え方を働かせながら思考・判断・表現する場面の設定)

4 単元の指導と評価の計画(全 時間)			
時間	学習内容 学習過程 等	【評価の観点】 評価規準 【評価方法】	学習課題(■)と主な学習活動(◎) ※学習活動を複数記述した場合、重点(◎)、それ以外(○)
		単元の中で「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現を目指す主な場面	
		【主体的に学習に取り組む態度】	■「 」 ◎
		[観察、振り返りシート]	主体的な学び 対話的な学び 深い学び
		【知識・技能】 [ノート]	■「 」 ◎
			主体的な学び 対話的な学び 深い学び
		【思考・判断・表現】 [観察、振り返りシート]	■「 」 ◎
			主体的な学び 対話的な学び 深い学び

※「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現していくことが求められると「答申」で述べられています。

1 単元の目標

- ・新学習指導要領の目標及び内容に基づきながら、単元の内容に合わせて記入します。
- ※ 新教育課程を先取りし「三つの柱」で、単元の目標を設定することとします。

2 単元で働かせる「見方・考え方」

- ・答申に示された「見方・考え方」に照らし、単元の内容に合わせて明確にします。
- ・「見方・考え方」を働かせ学習を深めていけるような、単元の「学習課題」につなげます。

■「見方・考え方」を働かせた学習活動の構想について

「見方・考え方」を軸とした授業改善につなげるためには、各単元・題材における「見方・考え方」を明確にし、授業の中で生徒の学びが深まるような「見方・考え方」を働かせた学習活動を構想していく必要があると考えます。本研究では、答申で示された各教科等の「見方・考え方」の文章構造に照らし、各単元・題材において育成を目指す資質・能力と学習内容を関連させながら、各単元・題材における「見方・考え方」を明確にしていきます。各単元・題材における「見方・考え方」を明確にすることで、各単元・題材の目標がより明確になったり、指導の手立てとして何が必要か見えてきたりするなど、指導の構想が深まるとともに、生徒が「見方・考え方」を働かせ学習を深めていくことができるような各単元・題材における学習課題や発問を構想することにもつながっていくと考えます。

3 単元における「学習課題」と「期待する姿」

【単元の学習課題】

- ・「見方・考え方」を働かせながら、単元全体で解決を目指すような学習課題とします。
- ・単元の目標と「見方・考え方」に基づき、端的に設定し、本単元の学習の本質に迫ることを目指します。

【期待する姿】

- ・単元の学習におけるゴール像としての生徒の姿をイメージして、記入します。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

- ・「答申」で示された各教科等における「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点の内容を押さえ、生徒の実態を鑑み、取捨選択しながら記入します。これをベースに「4 単元の指導と評価の計画」を組み立てていきます。(本研究1年次に作成した、各教科における「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた手立て」もご参照ください)
- ・授業改善の視点の括弧内の内容は、校内統一の視点として活用します。

4 単元の指導と評価の計画

- ・「学習内容・学習活動等」の項目は、学習内容と学習過程の2つを記入するのではなく、教科の特質に合わせ、必要な内容を選択して記入します。
- ・資質・能力の育成に向けた主な学習活動を◎で記入します。学習活動を複数記述した場合は、重点を◎、それ以外を○の記号で区別して記入し、単元全体での指導をどうデザインしていくか意識し、重点活動を絞り込むことを目指します。
- ・学習活動を組み立てていく際、各教科の授業改善の視点を基に、単元の中で「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現を目指す主な場面はどこかを単元全体を見通して構想し、濃い色で示します。
- ・学習課題は、単元の学習課題を解決することを基盤に、本時における学習課題を設定します。その際、生徒が学習課題に基づき自己の学習成果を振り返ることができる内容・文言となるよう留意します。
- ・1単位時間の評価項目は1～2を想定しています。

イ 単元構想の生徒との共有

生徒の主体的な学習としていくために、生徒自身が見通しを持って学習に取り組み、自己の学習を振り返って次につなげていくことが重要です。単元構想シートを作成することで明確にした単元や単位時間の学習課題や評価規準などを、次のように生徒との共有に活用しました。

- ・単元のはじめに、単元の学習課題や期待する姿などを生徒と共有し、単元の学習でどんな力を身に付けることを目指すのか理解し、見通しを持って学習に取り組むことができるようにする。
- ・単位時間の学習課題や評価規準に基づいた付けたい力などを生徒と共有し、単元全体の中での本時の位置付けを意識しながら、本時の学習に見通しを持って取り組んだり、自己の学習を振り返ったりできるようにする。